

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第3回
 第1章 坪田譲治先生
 その3 『びわの実学校』(続)

坪田譲治先生(1890~1982年)には、子どものころに2度お目にかかったことがある。

「新日本童話教室」

2018(平成30)年の末に亡くなった母宮川ひろが遺した、いろいろなものが、まだ、家のなかのあちこちにあって、整理が十分にすんでいない。

坪田譲治先生が1963(昭和38)年10月に創刊した童話雑誌『びわの実学校』は、母の手で10号ずつ紐でくくられて、戸棚のなかにある。ただ、創刊号は全ページのコピーを製本したもので、母は、第2号(63年12月)から購読したようだ。第2号から終刊号(第134号、86年4月)までは全部ある。『びわの実学校』の発行所は、坪田先生のお宅の家庭文庫「びわのみ文庫」だった。

第8号(64年12月)に、「びわのみ文庫からのおしらせ」として「新日本童話教室・第一期生募集」が掲載されている。――「社団法人・日本児童文学者協会では、こんど作品の添削指導を通して、新人作家を養成するため、常設の「新日本童話教室」を開設することになり、その会場に本文庫を提供することになりました。」開講は1965年1月~3月、月2回、全6回で終了である。講師には、坪田先生の名前もある。エッセイ「新日本童話教室とわたし」(『日本児童文学』1987年6月)によれば、母は、この記事を見たのだ。

そのころわたしは、文学などとは縁の遠いくらしをしていました。それがほんなことから、坪田譲治先生の講演をうかがう機会を得て、「びわの実学校」の読者にもなっていたのです。

書きたいとも書けるとも思ったわけではありません。そこ(「新日本童話教室」―宮川健郎注)へいったらまた、先生のお話がうかがえるだろうと、さっそく申し込みました。それなのに、第一期は定員二十名をこえて、もうしめきりましたというご返事です。

納得いかなくて、主催者である児童文学者協会まで、電話を入れてしまいました。

「つづけて第二期も募集しますので、それまでお待ちください」

事務局の女の方は、電話の向こうでそうおっしゃいました。

「第二期っていつごろですか? ほんとうにやったださるのですね」

わたしは、せきこむように念をおしました。

(宮川ひろ「新日本童話教室とわたし」、引用はエッセイ集『母からゆずられた前かけ』文溪堂1993年による)

母の落胆と焦りが見えるようだ。同じ年の5月開講の第二期生になった母は、

「やっと受講生としての席をいただけたのです。」と書いている。(注1)

横谷輝先生

塚原健二郎協会会長先生のおことばがあって、開講されました。当時の協会事務局長でいらっしゃった横谷輝先生がおひとりで、すべてのお世話をしてくださいました。受講料の受けつけ、提出作品印刷の依頼、講師先生のご紹介と、なにからなにまでです。

受講料三千円と作品添削料二百円をそえることになっていました。いまの物価になおしたら、どれほどの金額になるのか、わが家の暮らしでは高額なものでした。

「毎月千円ずつの分割でもいいんだよ」

横谷先生は、そうも言ってくださいました。横谷先生は、そういう先生でした。(同前)

兵庫県の小学校の綴方教師だった横谷輝先生(1929～73年)は、鳥越信・古田足日らの同人誌『小さい仲間』(1954年創刊)に参加して、児童文学の評論活動をはじめた。1958(昭和33)年には、教職をはなれて上京、翌年から日本児童文学者協会の事務局員として勤務、その後、約8年にわたって専任事務局長をつとめた。

先の母のエッセイによれば、つづけて開講された「新日本童話教室」第3期が終了した1965(昭和40)年11月の末に、第1期からの受講者があつまって勉強会をもつたらと呼びかけたのが、歴史児童文学の仕事が多い作家の来栖良夫先生と横谷輝先生だったという。毎月第一土曜日の午後に行われる勉強会は「土曜会」と名づけられ、会員は26人だった。ここに、第1期のあまんきみこさんも、第2期の母も参加した。(注2) この会の同人誌『どうわ教室』も刊行されることになった。

『どうわ教室』創刊号は、1966(昭和41)年4月発行。巻頭は横谷輝「童話(ママ)教室」への期待と課題—その創刊を祝して—、そのあとに母の短編「春駒」、そのまたあとに城戸典子(きどのりこ)さんの「靴屋のてるちゃん」とつづく。『どうわ教室』は、第6号(68年2月)まで刊行された。

創刊のころ、小学5年生だった私は、母といっしょに「土曜会」の遠足で井の頭公園に行ったりした。一度は、『どうわ教室』の何号だったかの合評会にもついて行った。兄弟のいない私がひとりで留守番ができない事情があったのかもしれない。会場は杉並区高円寺の東京電力サービスセンターだったが、合評会の途中で、どなたかの作品のある一文の意味がわからないという議論になった。母のとなりで、タイプ印刷の雑誌をのぞきこんでいた私は、思わず声をあげた。——「あっ、ここ字がまちがってる！」私は、誤植に気がついたのだ。文章の意味がとれないのは、誤植のせいだった。このときも出席していた横谷先生が「この子はえらいよ」と言ってくださった。私は、その場にいることを許されたような気がして、うれしかった。

横谷先生は、1973(昭和48)年8月14日に胃がんのために亡くなった。44歳だった。亡くなったときは日本子どもの本研究会会長で、東京・西神田の労音会館で

行われた告別式には 500 人が参列したという。(注 3)

一周忌には『横谷輝児童文学論集』全 3 巻(偕成社 1974 年)が刊行されたが、その後ほどなくして児童文学批評の勉強をはじめた私も、これを読んだ。学部のあるところである。第 1 巻『児童文学の思想と方法』は、もとは啓隆閣から刊行されたものだが(1969 年、増補版 73 年)、第 1 章「児童文学の基礎」からはじまり、「転換」「歴史」「方法」と展開して、第 5 章は「児童文学と教育」、第 6 章は「児童文学の文体と童話的風土」である。私は、横谷先生がご自分の考えを体系化していこうという意志を強く感じる、この第 1 巻をとりわけ熱心に読んだ。

いま、書棚から取り出してページを開くと、あちこちに線が引いてある。20 歳の私は、「われわれはなぜ児童文学をかくのか?」という問いに「児童文学で現代をとらえたいから」とみずから答える一方で、衰弱している児童文学批評の回復をうったえ、創作についても批評についても「方法」という観点から考察しようとした第 4 章「児童文学の方法」にもっとも強く引かれた。ここに、私のこれからの勉強の道があると思った。

横谷輝先生は、私をはじめて出会った児童文学評論家だった。

ホームランのような大ヒット

母が『びわの実学校』にはじめて投稿した短編「たからもの」が掲載されたのは第 16 号(1966 年 5 月)だった。きのう入学式をすませたばかりの 1 年 1 組の子どもたちと先生の「めいしこうかんかい」の話だ(私と同じ名前の「たけお」も登場する)。母は、同人誌『どうわ教室』に作品を発表しながら、『びわの実学校』にもたびたび投稿する。第 30 号までに、のべ 7 編が採用された。(注 4) 「たからもの」は、坪田譲治監修の学年別シリーズ『あたらしい日本の童話』1 年生(実業之日本社 1967 年)にも収録された。

第 16 号に「たからもの」が掲載されたあと、母は、第 20 号の編集担当だった今西祐行先生から作品を寄せるようにという葉書をいただく。母は、「五十本の手」、「あしたは参観日」の二つの短編をもって、杉並区井の頭の今西先生のお宅をはじめてたずねた。そのとき、先生は、「こういう短いものでいいから、連作で二百枚ぐらい書くと一冊の本になりますよ」とおっしゃったという。(注 5) 2 編は、第 20 号(1966 年 12 月)に掲載された。今西先生は、『びわの実学校』の「担任の先生」になってくださったのだ。以後、母は、今西先生をとおして投稿するようになり、「るすばん先生」も今西先生によって編集会議に持ち込まれた。

「るすばん先生」が掲載されたのは『びわの実学校』第 34 号(1969 年 4 月)、この号の坪田先生の「あとがき」から引く。

この三十四号の中心になるような作品は、「るすばん先生」なのです。宮川ひろさんは、何年前かに「たからもの」という短編で、みんなを感心させましたが、その後七編も短編を書きながら、この「たからもの」以上の作品が出ませんでした。それが今度、この「るすばん先生」で、まるでホームランのような大ヒットをとばしました。今西君から、宮川さんの作品ですがとって編集会議に出され

たそれは、八十何枚かなのです。なるべく分載しないで、一度に載せてあげたいと思います。今西君の提案で、みんな暫く考えこみました。しかし、「作品は立派です。」そういう今西君の言葉で、今までにない八十枚が一度に載ることになりました。後で私はこの作品を読みましたが、ついハンカチで目をおさえなければならぬような、感動的な場面もあり、やはり今西君の言葉どおりの、作品だと思いました。

「るすばん先生」は、全 21 ページの誌面をいただいた。挿絵は若林利代さんだ。そして、掲載から半年後には、ポプラ社から最初の単行本として刊行されたのである（菊地貞雄絵）。

『るすばん先生』という方法

2023年6月7日、少し暑い日だったけれど、『るすばん先生』の舞台になった小学校へ行ってみた。母が1968（昭和43）年の9月から12月まで産休補助教員としてつとめた東京都板橋区立三園小学校である。東武東上線・成増駅（そのころの家の最寄り駅の一つ）からバスで10分足らずのところだ。私自身は、はじめて行った。赤塚たんぼ、徳丸たんぼを埋め立てて集合住宅群を造成した高島平に隣接する地域に、1965（昭和40）年に開校された新しい学校だったが、いまは、きれいに整備された住宅地のなかに、すっぽりおさまっている。行ったのは水曜日で、水曜日はお昼まででおわるのだろうか、たどりついた午後1時ごろには、子どもたちがさかんに下校していた。

単行本『るすばん先生』の刊行から15年ほどのち、母は、この本を「はじめての子ども」と呼んで、執筆のころを振り返るエッセイを書いている（「はじめての子ども」『親子読書』1985年2月）。第3章「給食をたべないきみ子ちゃん」や第6章「沢田さんのほくら」のモデルになった子どもと彼女たちのその後についてもふれている。

宮川ひろは、一貫してリアリズムの作家で、生きて書いた人だ。しかし、経験をそのまま写すのではなく、作品には、経験を見直す視点がかんがえられ織り込まれている。『るすばん先生』なら、たぶん、「るすばん先生」という言い方が発見されたときに、その視点が形成され、作品世界が開かれていったにちがいない。「先生」ということばに「るすばん」という異質なことばがぶつけられることによって、子どもたちが毎日を過ごし、ときに子どもたちをしばることもある学校が相対化されることになるのだ。

『るすばん先生』の第1章「あたらしい先生」では、二学期の始業式で、「産休先生」の木村先生が朝礼台でこうあいさつする。

「小川先生がお休みのあいだだけ、るすばんにまいりました。るすばん先生です。わかいときに先生をやめてしまったので、もう二十年も、おかあさんしかしたことがありません。なにもわからない先生ですが、なかよくしてください。」

「先生」に異質な「るすばん」をぶつけるのは、文学理論でいう「異化」の仕事で、日常が急に「見なれないもの」になる。これが宮川ひろの方法である。第9章の「れいてんでかんぱい」もそうだ。「0点」という、こまった事態が「乾杯」という喜ばしいことと結びつくことによって新しい物語が生まれる。(注6)

母は、1971(昭和46)年刊行の『春駒のうた』(偕成社)について「書きたいと願っていたのはこの一作だけ」と記したことがあるが(『『春駒のうた』によせて』『児童文芸』1986年11月、引用は『母からゆずられた前かけ』前掲による)、ふるさとを描いた『春駒のうた』は第4作だ。デビュー作が『るすばん先生』だったことには、やはり意味がある。『るすばん先生』という方法が、やがて、多くの読者を獲得した『先生のつうしんぼ』(偕成社1976年)なども生み出す。子どもたちを評価する「先生」が評価される「つうしんぼ」である。これは、読者の驚きを引き出し、読者は、学校を描く日常物語を「見なれないもの」として体験することになる。

1969年の不安

父が夕食の最中に吐いたのは、1968(昭和43)年の年明け、1月か2月だった。いま思えば、これが脳梗塞のはじまりだった。高血圧症と動脈硬化症が悪化して、とうとう仕事をやめたのは、69年の5月である。父がきょうから勤めに行かないという朝、雨上がりの新緑がきれいだったことを記憶している。父はもうすぐ56歳、私は中学2年生だった。以後、1976(昭和51)年の入院まで、7年間自宅で療養する。

この前の月の4月、母の「るすばん先生」が『びわの実学校』に一挙掲載され、10月には単行本になった。母は46歳だった。

10月24日には、新宿区袋町の日本出版クラブ会館で出版記念会が催された。病気の父は欠席、私が詰襟の学生服で出席して、会のおしまい近くで家族としてお礼のことばを述べた。このときの芳名帳が残っているが、最初のページには坪田譲治先生おひとりだけのサインがあり、つぎのページから48人の方の署名がつづく。私のサインもある。私が坪田先生にお目にかかったのは、このときが2度めである。最初は、あまんきみこさんの『車のいろは空のいろ』(ポプラ社1968年)の出版記念会だが、そのことは、いずれまた書く。

母が坪田先生の思い出をつづったエッセイ「一枚の新聞から」(『国文学 解釈と鑑賞』1998年4月)に記したのは、おそらく、「るすばん先生」が『びわの実学校』に掲載され、単行本にもなったころのことだ。

拙いものを『びわの実学校』に拾っていただくたびに、先生のお宅まで雑誌をもらいにうかがった。そんなとき先生がおっしゃった。

「宮川さん、貧乏かい」

「はい」

私は、自信をもってこたえた。

「貧乏なら書けます。貧乏はいいものです。貧乏に力を借りてお書きなさい」

と。

このおことばを支えに、書いていこうと心にきめたのだった。

坪田先生は、母に大きなはげましと希望をあたえてくださった。母は、三園小学校のあとも東京都板橋区内の小学校で産休補助教員や非常勤の学校事務職員をしていたが、『るすばん先生』1冊だけが刊行された時期にもう専業作家になる決意をした。教育委員会からの正規採用の話もことわったという。(注7) 『るすばん先生』の出版はうれしいことだったけれど、母の決意は、中学2年生の私から見ても「暴挙」のように思われた。「ぼくは、高校に進学できるのだろうか……」、そう思った。

1969年、14歳。私はまだ、「風の中の子供」だった。

(第1章「坪田譲治先生」おわり)

(注)

- 1、日本児童文学者協会の機関誌『日本児童文学』1964年11月号の表3全部を使って、「新日本童話教室—第一期生募集について—」が告知されている。『びわの実学校』は、隔月刊のために、募集の知らせが掲載されるのが1か月あとになった。宮川ひろが第1期に間に合わなかったのは『びわの実学校』のほうを見たせいではないかというのは、宮田航平さんの意見である(日本児童文学学会 2023年度6月例会の研究発表「『びわの実学校』は「現代児童文学」を語るか—《童話の柱》を視座として—」、10日、於・武蔵野大学)。たしかに、わが家で『日本児童文学』のバックナンバーがそろっているのは1965年からで、64年11月号は所蔵がない。母は、「新日本童話教室」の受講生になって、65年1月号から購読することにしたのだと考えられる。
- 2、「新日本童話教室」第3期生のなかには安房直子さん(1943~93年)もいた。日本女子大学の学生だった安房さんは、すでに、大学が発行していた『目白児童文学』(編集責任・山室静)の創刊号(1962年6月)から作品を発表していたので、「土曜会」には加わらなかった。これも、母から聞いたことである。
- 3、特集・横谷輝追悼(『日本児童文学』1973年12月)参照。
- 4、この時期に、宮川ひろが『どうわ教室』に発表した作品、『びわの実学校』に掲載された作品は、以下のとおりである。
 - ・『どうわ教室』 「春駒」(創刊号、1966年4月)、「仲宿」(第3号、66年9月)、「よめごさん」(第4号、67年2月)、「ふくぶくろ」(第5号、67年5月)、「こわれたへい」(第6号、68年2月)
 - ・『びわの実学校』 「たからもの」(第16号、1966年5月)、「五十本の手」(第20号、66年12月)、「あしたは参観日」(同前)、「小さなぼっくり」(第22号、67年4月)、「わかいえきいんさん」(同前)、「おはじき」(第26号、67年12月)、「夜のかげぼうし」(第30号、68年8月) 第30号の「夜のかげぼうし」は、のちに『びわの実学校』第72~80号(1975年11月~77年3月)に連載され、1978(昭和53)年に講談社から刊行された長編「夜のかげぼうし」の原型にあ

たる短編である。

- 5、宮川ひろ「『ねことオルガン』との出会いから」(『日本児童文学』1980年10月)参照。
- 6、私は、小学1年生の3学期に理科の「かげ」の単元のまとめのテストで100点満点の10点をとった。母は、その10点がよほどショックだったらしく、採点された答案を持ち帰った日の夕食はごちそうをつくって、家族3人で乾杯した。「れいてんでかんぱい」の章は、このときの体験がもとになっている。私は、「十点でかんぱい」という作文を書いた。1年生の秋から小学校がおわるころまで、私は、毎日のように作文や詩を書き、たくさんの冊数の作文帳が残っている。その作文帳は、長く母の手もとにあった。母が亡くなったあと出てきた作文帳は全体の半分ほどで(あちこちに母の付箋がある)、「十点でかんぱい」の書かれたノートは、その中にはない。この連載がおわるまでに、残り半分の作文帳が見つかるといいのだが、『しっばいにかんぱい!』にはじまる、母の晩年の『かんぱい!』シリーズ全10冊(童心社2008~16年、小泉るみ子絵)は、「れいてんでかんぱい」が発展したものだ。
- 7、『日本経済新聞』(2008年10月23日)のインタビュー記事「貧乏と春待つ心 宮川ひろさんに聞く」参照。

第1章「坪田譲治先生」関連年表

1890(明治 23)年	3月3日、坪田譲治、岡山県に生まれる。
1908(明治 41)年	11月、坪田譲治「小塔」(『明治の女子』)。
1918(大正 7)年	7月、鈴木三重吉主宰の童話雑誌『赤い鳥』創刊。
1923(大正 12)年	3月15日、宮川ひろ、群馬県に生まれる。
1926(大正 15)年	12月、坪田譲治の最初の小説集『正太の馬』刊行(春陽堂)。
1935(昭和 10)年	3月、坪田譲治「お化けの世界」(『改造』)。
1936(昭和 11)年	9月5日、坪田譲治「風の中の子供」連載開始(『東京朝日新聞』夕刊、～11月6日)。
1937(昭和 12)年	映画「風の中の子供」(清水宏監督、松竹)公開。
1938(昭和 13)年	1月1日、坪田譲治「子供の四季」連載開始(『都新聞』、～6月16日)。
1946(昭和 21)年	4月、9月、坪田譲治「わが師・わが友」(『新潮』)。
1953(昭和 28)年	9月、早大童話会「少年文学」の旗の下に！」(『少年文学』)。
1959(昭和 34)年	8月、坪田譲治の「桃の会」はじまる。
1960(昭和 35)年	4月、石井桃子ほか『子どもと文学』(中央公論社)。12月、坪田譲治「童話今日の問題」正・続・完(『保育の手帖』、～61年2月)。
1963(昭和 38)年	6月、聖徳学園ではじまった「子どもをめぐる文化教室」で、宮川ひろ、坪田譲治に出会う。10月、坪田譲治主宰の童話雑誌『びわの実学校』創刊。
1965(昭和 40)年	1月、日本児童文学者協会主催「新日本童話教室」第1期開講(於・びわのみ文庫、宮川ひろは5月からの第2期を受講)。
1966(昭和 41)年	4月、『どうわ教室』(土曜会)創刊。5月、宮川ひろ「たからもの」(『びわの実学校』第16号)。
1968(昭和 43)年	9～12月、宮川ひろ、東京都板橋区立三園小学校で産休補助教員をつとめる。
1969(昭和 44)年	4月、宮川ひろ「るすばん先生」(『びわの実学校』第34号)。 10月、単行本『るすばん先生』(ポプラ社)。
1973(昭和 48)年	8月14日、横谷輝没。44歳。
1974(昭和 49)年	8月、『横谷輝児童文学論集』全3巻(偕成社)。
1981(昭和 56)年	3月8日、宮川健三郎没。67歳。
1982(昭和 57)年	7月7日、坪田譲治没。92歳。
1984(昭和 59)年	4月、坪田理基男『坪田譲治作品の背景——ランプ芯会社にまつわる話』(理論社)。
2018(平成 30)年	12月29日、宮川ひろ没。95歳。